

氾濫原のロジと疎開林帯の ブンダ

西部ザンビアにおける民族集団間の 相互交流

岡本雅博

はじめに

中南部アフリカを流れるザンベジ川の上流域には、およそ8000平方キロメートルの面積をもつバロツェ氾濫原が広がっている。この氾濫原が位置するザンビア共和国の西部州は、かつてのロジ王国の領域にほぼ重なる。現在でもこの地域では、従来の王制と深く結びついた土地制度や慣習法が、ザンビアという国家の諸制度と並立しながら維持されている。

ロジ王国は、バロツェ氾濫原を中心に、周辺の疎開林帯に居住する他の民族集団を吸収しながら成立したという側面をもつ。そのため、現在の西部ザンビアには、ロジをはじめとした多くの民族集団が存在する。基本的に、ロジはバロツェ氾濫原を主たる居住域とし、他の民族集団は疎開林帯を居住域としている。

氾濫原のロジは、農業・牛牧畜・漁撈を基軸とした複合的な生業形態を発達させてきた。氾濫原の生業は、定期的に起こる洪水と不可分の関係に

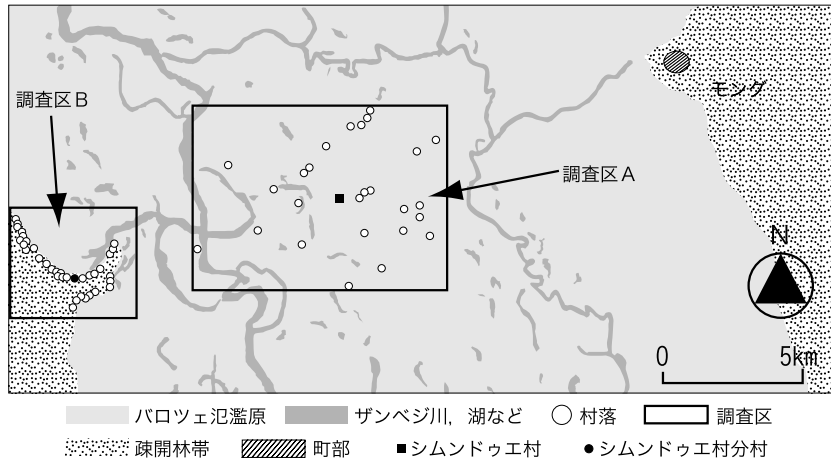
あり、それぞれの生業活動は洪水がつくる水環境の季節的な変化にあわせて営まれている。

いっぽう周辺の疎開林帯においては、耐乾性が高いキャッサバやトウジンビエなどを栽培する焼畑農耕が生業の基幹となっている。とくに、アンゴラから移動してきたブンダという民族集団は、焼畑農耕に依存した生活を送っている。

これまで筆者は、バロツェ氾濫原に位置するシムンドゥエ村に滞在し、ロジの生業や社会に関する調査研究に従事してきた。2002年10月から12月に実施した現地調査では、シムンドゥエ村が位置するバロツェ氾濫原(調査区A)、および同村の分村が設けられている疎開林帯(調査区B)にそれぞれ調査区を設定し(図1)、各エリア内のすべての村落を対象とした聞き取り調査をおこなった。

本稿では、2002年の調査で得られた資料を基礎として、とくにロジとブンダという二つの民族集団に着目し、両者のあいだに起こった生業技術の伝播をとりあげ、民族集団間の相互交流について検討したい。

図1 調査区の位置



(注) 調査区外の村落は表示していない。

1 氾濫原の村落

ロジの人々が住むシモンドゥエ村は、西部州の州都であるモンダの町から南西の方角に約12キロメートルの地点、バロツェ氾濫原のほぼ中央域に位置する人口約50人の村である。ザンベジ川の季節的な洪水を避けるために、村は周囲との比高差が3～4メートル程度あるマウンド状の微高地に設けられている。バロツェ氾濫原には、このような村があちらこちらに点在している。

ザンベジ川の水位が上昇する2月から5月頃までの期間、バロツェ氾濫原の一角は冠水する。とくに、洪水位のピークとなる4月頃には、微高地にある住居も水に浸かることとなる。そのため、氾濫原の多くの村では、洪水から一時的に避難するための分村が疎開林帯に設けられている。また、牛の放牧地も冠水するため、疎開林帯への牛の移牧がおこなわれている。

氾濫原に設定した調査区Aには、シモンドゥエ

村など27の村が存在しており、そのうち25村がロジの村である。このエリアでは、1910年代には22の村がすでに成立しており、残りの5村も創設されてから40～70年の歴史をもつ。

氾濫原の村は、その大多数がロジの村によって占められており、そして創設されてから長い年月を経ているといえる。

2 疎開林帯の村落

シモンドゥエ村の分村は、氾濫原の本村から南西の方角に約8キロメートル離れた疎開林帯にある。疎開林帯に設定した調査区Bには、シモンドゥエ村の分村を含む39の村が存在する。

村々は、氾濫原に接した疎開林の辺縁部に列状に並んでいる。西部ザンビアの疎開林にはカラハリ砂土が深く堆積しており、井戸を掘ることは容易ではない。そのため、村は水の便がよい氾濫原沿いに立地しているとみられる。

調査区Bに分布する村の住民構成を民族集団ご

とに分類すると、ロジの村が26村、ブンダの村が11村、複数の民族集団が混住する村が2村となる。ロジの村には、氾濫原の住民が洪水期のあいだだけ一時滞在するための分村が5村あるが、残りの21村は氾濫原に本村をもたない村である。

1910年代には、このエリアにはロジの村が8村あったにすぎず、村の数が増加したのは1950年以降のことである。またブンダの村の成立は新しく、1950年代に2村、60年代に2村、70年代に4村、80～90年代に3村と徐々に増加していった。移動してきたブンダは、ロジの慣習法に則った手続きを踏んだ後に、土地をあてがわれ、定住するようになった。

以上のように、疎開林帯のこのエリアで現在みられるような村の分布状況が成立したのは、わずか20～30年前のことである。

3 ロジに伝播したブンダの技術

長年にわたってパロツェ氾濫原を生活域とし、氾濫原という生態環境に適応した生業形態を練りあげてきたロジにとって、疎開林帯とは洪水期のあいだの一時的に避難する場所ではなかった。そのような疎開林帯に、焼畑農耕民ともいえるブンダが定着するようになり、ロジの生業や生活には変化が生じた。移住してきたブンダとの関わりの中かで、あらたにロジも焼畑耕作を開始するようになったのである。

調査区Bでは、あるロジの男性が、友人になったブンダから、焼畑の方法を教わるとともに、キャッサバの種茎とトウジンビエの種子を分けてもらい、1955年に焼畑耕作を開始した。その後、近隣の村でも、ブンダからキャッサバの種茎とトウジンビエの種子を入手し、焼畑耕作をはじめた者がでてきた。そして64年には、調査区B内のす

べてロジの村が焼畑を開墾して、キャッサバやトウジンビエを栽培するようになったという。

シムンドゥエ村の住民も、疎開林帯での焼畑農耕に着手するようになったが、1970年代以降それは下火となった。ところが近年になって、シムンドゥエ村の住民の一部は、焼畑を再び拓いてキャッサバを栽培するようになっている。氾濫原の農業は、季節的な洪水の影響を受けやすく、とくに水位が高い年には不作となる場合がある。そのような不安定な農業を補完するために、彼らは焼畑農耕を再開したのである。

焼畑農耕の技術の普及に付随して、キャッサバやトウジンビエといった栽培作物も、ブンダからロジに伝播した。ロジの主食である粉粥餅は、かつてはモロコシを材料にしていたが、モロコシ栽培が衰微した現在では、トウモロコシからつくるように変化している。しかし、近年では、キャッサバからつくった粉粥餅も受け入れられるようになった。とくに、トウモロコシの粉とキャッサバの粉を混ぜて調理した粉粥餅は、味が良いため、それを好むロジも少なくない。

トウジンビエが普及したことによって、ロジの酒づくりにも変化が生じた。もともとは、ロジが自家醸造する濁酒の材料はモロコシであったが、モロコシの代わりにトウジンビエを利用することが多くなってきたのである。トウジンビエからつくった濁酒は味わい深く、ロジから高い価値が与えられている。

また、ブンダとの接触により、ロジの漁撈にも変化は生じた。洪水が引いたあとの氾濫原では、水深が膝丈ほどになった微凹地を利用した漁撈が、ロジの女性によっておこなわれている。その漁には、リシゴと呼ばれる漁具を用いているが、これは1960年代にブンダからロジに普及したものである。リシゴは、口の部分が楕円状に大きく開い

た籠状の漁具であるが、それが伝わる以前は円筒型の単純な形状の籠を用いたり、あるいは素手で魚を捕まえたりしたという。

ブンダがつくるリシゴは疎開林帯に生育する草本からできているが、ロジの女性は氾濫原に自生する葦 (*Phragmites* sp., Graminae) の茎を使ってリシゴを作製するようになった。現在では、リシゴを用いた漁で捕獲した魚は、物々交換における重要な交換財となっている。

4 ブンダに伝播したロジの技術

ここまで述べてきたように、いくつかの技術がブンダからロジに伝播した。いっぽう、ロジと接触する過程において、ブンダの側にも変化は生じた。牛牧畜の伝統をもたないブンダが牛飼養に関わるようになったのである。

氾濫原の村々では、バロツェ氾濫原の一带に洪水域が拡大し、放牧地が冠水する2月から6月までの約4カ月のあいだ、疎開林帯に牛群を移動させる必要がある。氾濫原の調査区Aでは、牛を保有する23村のすべての村が、このような移牧をおこなっている。氾濫原のなかでも西寄りの村は西側の疎開林帯に、東寄りの村では東側の疎開林帯に牛群を移動させている。

従来は、氾濫原の村の牧童も疎開林帯に移り住んで牛の世話にあっていた。しかし、調査区Aでは現在、牛群とともに牧童が移動するケースは1村でしかみられない。他の22村では、移牧の期間、疎開林帯の他の村に牛群を預けるように変化した。このような牛の預託は、1950年代にはじまり、とくに70年代に広く普及した。牛の預託先となる村は、はじめのうちはロジの村が多かったが、近年ではブンダの村も増加しつつある。

シムドゥエ村が牛の預託先として選んだ村は、

疎開林帯の調査区Bにあるサチロンデラというブンダの村である。アンゴラから移動してきたブンダによって、現在の場所にサチロンデラ村が設立されたのは1968年のことである。その後、双方の村長どうしが友人となり、76年からシムドゥエ村は牛をサチロンデラ村に預けるようになった。今まで牛飼養に携わったことがなかったブンダが、ロジとの接触を契機に、牛飼養に携わるようになったのである。

シムドゥエ村が他の村に牛を預託するようになった要因の一つに、牧童の確保が困難になったことがあげられる。植民地時代以降、学校教育が普及し、牧童の適齢期にあたる青少年の多くが小学校に通うようになり、4カ月にも及ぶ移牧の期間にわたり牧童を確保することが困難になったのである。すなわち、牛を預託する側には、牛の世話にあたる労働力を調達できるという利点があったといえる。

いっぽう牛群を受託する側は、牛を預かっている4カ月間のあいだ、放牧など牛の世話に関するすべての労働をしなければならぬが、牛のミルクと排泄物を自由に利用できるというメリットがある。とくに重要であるとみられるのが、牛の排泄物の利用である。牛を受託したブンダは、作付けが終わった焼畑耕地のなかに牛囲いを設け、牛が排泄する糞尿による施肥をおこなうようになったのである。

このような焼畑耕地での施肥は、氾濫原のロジが施肥を目的として、収穫が済んだ耕地に牛囲いを設ける方法を応用した技術である。ロジは牛囲いによる施肥をおこなうことによって、氾濫原における耕地の常畑的利用を可能としてきた。そして、疎開林帯のブンダもロジから受容した新たな施肥法を導入することにより、開墾した焼畑を従来よりも長く作付けできるように変化させてきた。

氾濫原の調査区 A では、23村のうち10村がブンダの村を預託先とした経験をもつ。また、疎開林帯の調査区 B における11村のブンダのうち4村が氾濫原の牛群を受託したことがあり、1960年代以前に設立されたブンダの村に限定すると、4村のうち3村が受託した経験をもつ。このことは、定着してある程度の年月を経たブンダが、周りが実践する牛の扱い方を見聞し、その方法がある程度習得し、かつロジとの信頼関係を築いたうえで、このような牛を介したパートナーシップを結ぶに至っていることを示唆している。

結びにかえて

ここまで述べてきたように、氾濫原のロジと疎開林帯のブンダのあいだには、いくつかの生業技術の伝播と受容が展開してきた。

氾濫原のロジは、新たに参入してきたブンダから、焼畑農耕の技術やそれにとまなう栽培作物、あるいは新しい漁具などを受け入れ、自分たちのものとしてきた。また、ロジと関わるなかで、ブ

ンダも牛飼養の技術を会得し、さらに焼畑農耕に牛を取り込むことによって、新たな農耕システムをつくりあげている。

このような、ロジとブンダ間に生じた生業技術の伝播や受容は、異なる種が互いに関係しあいながら相互に進化するという、生態学における共進化の概念ときわめてよく似ている。異なる特性をもつロジとブンダが接触をするなかで、互いの技術を受け入れ、それぞれの生業技術を発展させてきたのである。各民族集団は閉鎖的に孤立して存在しているのではなく、それぞれが相互交流しあいながら地域社会を形成しているとみることができる。

民族のモザイクといわれるように、アフリカ大陸には数多くの民族集団が存在している。このような状況は、紛争の元凶や国家の統合の阻害要因とみなされるなど、否定的な面が強調されることが多かった。しかし、村レベルの視点に立って眺めてみると、多民族的状況のアフリカを展望する新たな可能性がみえてくる。

(おかもと・まさひろ / 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)